

“竜の眼” — 資料と短信 —

巫神図—神々の家族写真—

真鍋祐子※

和歌山県に、通称「アメリカ村」と呼ばれる漁村がある。戦前、村をあげてカナダに移民し、そして敗戦後、また大挙して帰郷した人々の村である。しかしまだ、親類縁者をカナダに残している人、カナダ政府からの年金で暮らしている人等、カナダとの結び付きは固い。彼らの帰国の動機を窺って見ると、老親の最期を見取ること、そして位牌の問題が大半を占める。仮に彼らを研究・調査の対象とする場合、親族構造を軸に据えるのも一つのやり方かもしれない。ところで3年ほど前、このアメリカ村をフィールド調査していた友人から面白い話を聞いた。村人たちの“写真好き”についてである。彼女が聞き取り調査に回った民家には、必ずと言ってよいほど、居間に家族の写真が飾ってあったという。このことは彼女の関心をおおいに引いたが、解釈に悩んでいるというのが実状であった。

考えたら、私も思い当たらぬ点がなくもないのであった。“写真好き”は、私のフィールドである韓国の人々にもそっくりあてはまるのだ。まず、彼らはレンズに向かってポーズをとるのが実にうまい。そして現象した作品（主として家族写真）は、アメリカ村の人々と同様、家の中のそこかしこに誇らしげに飾られることが多い。まだ韓国に行きはじめての頃、この「家族写真を飾る」という行為は、私の目には少なからず奇異に写ったものである。翻って、自分のことを振り返って見ると、

※筑波大学大学院社会学研究科

私にとって写真を飾ることのイメージは、ただもうおどろおどろしたものだった。法事の時以外は使われることのない本家の薄暗い仏間の、上のほうから私達を睥睨していた先祖たちの遺影……。写真が幼い私に与えたものは、畏怖である。

では、こうした感情はどこから来るのだろうか？否、そもそも人々は何故、写真を飾ろうとするのだろうか。そしてこの行為の中に、一体いかなる意味を求めているのだろうか？写真の歴史は新しい。ということは、かつて、写真にとって替わられた基層的な何かが民俗文化の中に含まれていたに相違ない、とも考えうる。アメリカ村の人々の写真に対する愛着は、単に「ハイトン（high-tone）意識」という枠組だけでははかりきれないのではないか……。友人の話を聞きながら、私は、その背後にある“何か”を探っていた。と思い始めていた。

今年に入って、その名もずばり『写真論—その社会的効用—』と題する本が出版された。著者のピエール・ブルデューはフランスの社会学者である。彼によれば、「写真に付与されている意味や機能は、集団の構造やその多少顕著な差異化、そして中でも社会構造におけるその位置等に直接結びつけられている」という。そこで第一に指摘されるのは「統合の指標であり手段たる写真」、即ち写真の「家族的機能」である。この点に関しては「家族写真の意味の変化」が見られるが、元来は、既存の関係を確認し維持するうえでの「儀礼的意味合い」が含まれていた（佐藤友光子、1989年）。かかる写真は、「写す行為」から「保存する行為」への一連の選択において、フォーマルな方法がとられる。アメリカ村や韓国の家族写真、そして私の見た先祖の遺影等は、いずれも親族集団の統合に意味をおくものであろう。そして、<可

視性＝読解性」というブルデューの指摘を待つまでもなく、上記の一連の選択は、集団のエートスの介在によってこそ可能なものである。更に彼はこうも言う。「写真は『憑依 (appartenance)』と呼ばれているものの役割を演じるように思われる」と。

かかる視点は、私の研究対象である韓国巫俗を考える上でも有用だ。ムダン型巫者たちは自宅に必ず神壇を持っているが、壁一面に「巫神図」と呼ばれる絵が貼られている。これは巫者に降りた神々の肖像画（一枚につき一神ずつ）で、描き方は極めて写実的である。実体のない巫俗神を可視的に象徴する巫神図は、その写実性故、巫者やクライアントたちにとっては神そのものである。また、それには専門の絵師がおり、ブルデューの言うところの「完全に聖別された諸芸術」の一つである。巫神図をはじめとする巫具は、人々の意識下に内在する巫俗のコスモロジーを顕在化することで、再びそれを内面化させるという循環機能の一端を担っている（金泰坤、1978年）。

多くの場合、巫儀は神壇、即ち巫神図の前で催されるが、面白いことに巫神図は単独で用いられることはまずない。巫者の家以外の場所で営まれる際にもそうである。神々は集団で移動し、配列順も寸分変わらない。そして、祭場の中央で人々を睥睨するのみだ。これを私は「神々の家族写真」と名付けてみた。韓国巫俗の神統は、位階制のもとに組織化され、各自はそれぞれに独立した役割を持つ。写真分析を通して発見される事柄の一つに、「対象者を取りまく諸関係」が挙げられるが（佐藤、前掲）、巫神図の配列にも同様のことが見いだされないだろうか。

そしてまた、「統合の指標であり手段たる巫神図」としてこれを見た場合、韓国巫俗の「家族主義的性格」という秋葉隆の指摘が思い起こされる

であろう。成巫した者は、神母－神娘関係を軸とするクッペー組織の中に組み込まれる。これは宗教的な疑似家族制度である。巫儀のない日常生活においても、巫者は巫神図の神々に玉水を捧げ手を合わせる。そこでは、彼女は神の家族に統合された存在なのである。巫儀の時、この「神々の家族写真」は、広く他の巫者たちやクライアント、見物人等にも押し広げられる。これは写真の提供する、「集団の団結が荘厳に再確認されることになる社会生活の最高の瞬間を荘厳化する手段」と同様の機能であると考えられる。

巫神図について取り上げた韓国の巫俗研究は、残念ながらまだ皆無に近い状態である。巫歌や他の巫具の陰に隠れて、巫神図は物言わぬ神々の姿なのである。だがそれは、写真の場合と同じく、「不在の対象の不在としての表現である」と同時に、「意志的選択の、すなわち知覚に際して作用する意識的選別の結果である。」しかるに、ブルデューの『写真論』は実に示唆に富んでいるといえる。今後、巫神図の分析を通して神々のコスモロジーを探ることは、私にとって非常に興味深い一つのテーマである。

<参考文献>

- ・ P. ブルデュー『写真論－その社会的効用－』（山縣熙、山縣直子訳）、法政大学出版会、1990
- ・ 佐藤友光子「家族写真と家族研究－写真資料の有用性と問題点についての考察－」『社会学年誌』30、早稲田大学社会学会、1989
- ・ 金泰坤「韓国巫俗の神観」『シャーマニズムの世界』（桜井徳太郎編）、春秋社、1978
- ・ 秋葉隆『朝鮮巫俗の現地研究』養徳社、1950